

中世日本と中国の錢貨流通の共時性

東京大学東洋文化研究所教授 黒田明伸

一国に一通貨が常識である現代に生きるわれわれが、中世の貨幣世界を正しく理解するには、まずその常識を取り払うことが必要です。精美であれば正式な通貨であり、そうでなければ私鑄錢というような単純な外観による出自の区別は通用しませんし、人口に膾炙かいしやしている「悪貨は良貨を駆逐する」は、官鑄錢や私鑄錢、物品貨幣が重層的に流通していた中世の日本や中国では成り立たないようです。銅錢が圧倒的に不足していた一五世紀、日本と中国では、時を同じくして同じような貨幣動向がみられました。これらは東アジアの全体の動向と密接に関連しています。今回は、黒田明伸先生に、その共時性をテーマにお話を伺いました。

監修／東京大学大学院総合文化研究科准教授 桜井英治

発掘された銅錢の不思議

先日福井県のあるお寺の裏山が崩れて、そこから出土した大きな瓶の中から何千枚もの中国の銅錢が出てきました。一六世紀の地層から出土した瓶の中に、七世紀から一五世紀までの数百年にわたって発行された銅錢が一緒に埋まっていたのです。東アジアでは、こういう出土の仕方をするケースが数多くありますが、ヨーロッパではほとんどあり得ないことなのです。一一世紀ごろのイギリスやフ

ランスの埋蔵銀貨を調べてみると、せいぜい一〇年ぐらいの発行年の幅です。

これは貨幣を発行する王や諸侯が再鑄造の指令のたびに旧通貨の使用を停止した西洋と、歴代の古錢の並行流通を是認した東アジアの貨幣制度との違いを反映しています。この違いを考えるだけでも面白いことが分かります。

還流する貨幣、しない貨幣

お金は還流するのが当然と考え、てしまいがちですが、実際には、

戻りやすいお金とそうでないお金があるのです。例えば、一万円札と一円玉の物理的な動きをトレースしたとします。全く違う動きをするはずですが、一万円札（高額通貨）の方が比較的早く戻りやすい一方、一円玉（小額通貨）は一度ばらまいてしまうと、まずもとへ戻らないでしょう。それと同じことが過去の貨幣にもいえるのです。

ヨーロッパでは、銀貨を使用していたことに加え、発行量も少なく地域も限定されているため、比較のお金は戻りやすいのです。

ところが、かつての東アジアでは中国が全人類の四分の一も支配していました。そんな広いエリアに大量の、しかも銅錢という小額の貨幣を発行しているわけですから、発行したお金はなかなか戻ってきません。

中国のように広い地域に小額通貨を出しているところでは、貨幣は還流することもあれば、滞って戻ってこないこともあることを考えないと、現実のお金の動きは分からないのです。ヨーロッパでは、王が変わるとそれまでの通貨を回収して新しい通貨に鑄直すのが普通ですが、広大な範囲に細かいお金がばらまかれている中国ではそ

明代の東アジア・東南アジア（15世紀頃）



銅錢は、日本をはじめ、当時の琉球、ジャワなど環シナ海一帯に流通していた。



北宋錢・聖宋元宝（1101年から鑄造開始）の精錢（右側）と悪錢（左側）。日本列島での一括出土埋蔵錢の八割は北宋の年号などをもつ北宋錢が占めている。これは中国における出土状況とおおむね合致する。明代中期は、公式の通貨供給がほとんどなされず、よくみなれた錢貨である歴代の古錢が私鑄された（いずれも貨幣博物館所蔵）。



うはいきません。

アジア経済史、貨幣論が専門の東京大学東洋文化研究所の黒田明伸教授。著書『中華帝国の構造と世界経済』で1994年サントリー学芸賞受賞。



中国貨幣史の最大の特徴は、その量目四グラムほどの銅銭といふ一文額面の単位貨幣に二〇〇〇年間依存しつづけたことですが、それは高額面通貨中心の幣制と比べて費用のかかる制度でした。王朝が質のいい貨幣を発行して民を潤してこそ天下が治まるといふ考え方に合ったものでしたが、質より充分な量を求める民衆の側の私鑄を誘発しました。他方、ヨーロッパの中世も一三世紀までは高額通貨を鑄造せずペンスのもとになった単位貨幣銀貨に依っていたのですが、決定的に違うのは、ペンスの方は四〇〇年のうちに重量も銀の純度も次第に減っていったことです。国王たちが財政危機を迎えるたびに質の悪い貨幣を発行するので、商人たちは質のよい貨幣を出すことを要求するのが常でした。現実が異なっていたので、貨幣思想も両者ではかなり違ったものになっていくわけです。

銅銭不足と「新銭」の関係

二〇〇〇年間銅銭が正式通貨だったにもかかわらず、銅銭を大量に発行したのは紀元前二一世紀の漢の武帝のときと、一世紀紀宋の王安石の時代、そして一八世紀の乾隆帝の時代の三回です。残りの時期はおおむね通貨不足で、鑄直して小さくなった貨幣がまともな貨幣と併存するわけです。

ことに一五世紀の東アジアは、銅銭の影が薄い時代でした。明朝は費用もかかる銅銭鑄造にきわめて消極的で、中国各地では、貝貨や銀塊、布、米など、硬貨ではないものをそれぞれで使っていたのが実情です。ただし大量の兵士を駐留させていた北辺では銅銭を頒布する必要があり、銅銭の相場が高くなっていました。そうした銅銭需給の地域差は南方での北方向け私鑄を誘発します。一五世紀半ばには明銭の私鑄も行われていましたが、一五世紀末以降は開元通宝や元豊通宝など、よく知られている古い年代の銭の私鑄ばかりになります。ある一七世紀初の中国の地方志には一六世紀中頃に「元

豊通宝などを私鑄した」とはつきり書いてあります。

その一五世紀末から「新銭」という表現が史料によく現れるようになりますが、本当の北宋銭、すなわち古銭に対して、「元豊通宝」などと一一世紀の年代が鑄込んであるのに、ぴかぴかで見ても古くない。それを「新銭」と呼んだようです。

偽宋銭の大量流入は市場での銅銭の取捨選択を引き起こします。が、王朝が主として禁止しようとしたのは、私鑄銭の使用の方ではなく、むしろそれらに対する撰銭ふるいせんの方でした。そこには、流通貨幣を制限すると物価が上がるという現代の貨幣数量説とは逆の発想があります。つまり、撰銭により貨幣数量が減少すると物が出回らなくなり、結局、物価に跳ね返る、と。そして、この撰銭禁止は、同じ時期、同じように日本でも現れるのです。

日本の銅の影響力

明朝はモンゴル民族との戦いに備えて万里の長城から北京に大量の兵士を張り付けていましたが、

南（福建省）には宋代に大量発行された銅銭のストックがあり、その配置が、日明貿易で中国に行つた日本人が記録しているような、「北は銅銭が高く、南は安い」状況を作り上げていたのです。

ただし、南から北に大量に銅銭が動いたきっかけは日明貿易だと私は考えています。江南において私鑄の永樂通宝が現れたという一四六〇年ごろからの記事と、日本の貿易船が銅を売り渡した時期、そして日中双方が残っている銅価格が一致しているのです。銅不足で困っているときに日本から銅がきたのです。

北京では一四八〇年に「新銭」が大量に入ってきて人々が洪武や永樂などの既存の明銭を抜き取り、保蔵しはじめました。そのすぐ後一四八五年に日本では日明貿易の当事者である大内氏が撰銭令を發布し、明銭（永樂銭と宣徳銭）の一定条件のもとでの使用が命じられました。明銭を巡る動きが、一四八〇年前後相継いで東シナ海で起きてくるのです。この頃から日本、中国ともに銭貨流通の多層化を共時的に経験することになります。

石見銀でつくられた丁銀「石州銀」
(貨幣博物館所蔵)。



「テイセラ日本図」(鳥根県教育委員会所蔵)。ポルトガル人ルイス・テイセラによって1595年に製作された日本図には、石見銀山(現在の鳥根県大田市)の場所に大きくラテン語で「Argenti fodinae(銀鉱山)」と記されているのが見て取れる。

一六世紀の初め、上海育ちの士大夫が「幼い頃は洪武銭を見たが、今は宋銭ばかりだ」と書いています。明朝治下にもかかわらず、明銭が消えていくのです。ぴかぴかの新銭を含めて宋銭がはびこりだしたのでしょう。

ところで、共通した出土銭パターンを持つ日本と中国ですが、ひとつだけ違うのは、宋銭が多い中国も日本は永楽通宝が随分多いという点です。最近、茨城県の東海

村で永楽銭の枝銭が発見されました。これは日本で私鑄していた証拠と考えられます。その金属分析をすると、中国製の永楽銭と日本製と思われる永楽銭の中間にあたります。中国銭と日本産金属を混ぜたのかもしれない。いずれにせよ、今日われわれが目にする相当数の永楽銭は永楽年間より後の時代に私鑄されたと考えた方がよいでしょう。

悪貨は良貨を駆逐しない

貨幣の歴史が物語るのは、政府保証や素材価値がなくとも、取引する仲間がある程度のまとまりをつくって、ローカルに合意が成立すればおかしきものは成立するということです。ただし、このレベルのものは、日常の米やみそを買うときはいいけれど、城下町にお出かけして絹の織物を買う場合には受け取ってくれませんから、どうしてもお金为重層的にならざるを得ません。そうした重層的な世界では、「悪貨は良貨を駆逐する」という「常識」は通用しません。一つのお金しか通用しないという世界であれば、確かに悪いお金が入ってくると、良いお金はみんな保存されてしまうので、悪いお金に代替されて駆逐されることになりませんが、重層的な世界では、良いお金はステージを上げてもう少し高額な取引に使う。つまり駆逐されないのです。額面や流通空間の広さによる貨幣の動きの違いをおさえると、銭貨の多層化の意味も理解しやすくなります。

石高制と銀経済へのシフト

室町時代には知行を銭建てにする貫高制が進行していきました。普段の売買では米も使っていましたが、土地売買では銭建て化が進んでいきました。にもかかわらず、豊臣秀吉の時代になると石高制になってしまいます。金属貨幣から物品貨幣に戻った世界的にも珍しい現象です。

ごろ本格的に石見銀山の開発が始まって、中国への銀の最初の大量供給者になります。銀を中国へ持つていけば高価な絹や唐物が買え、何倍にもなって戻ってくるのです。ただし、勘合貿易以外は禁止されている当時、それは海賊貿易になります。非公式であれ、それによって銅銭の供給もできていたため、貫高制が進んだと考えられます。

ところが、一五六七年前後に、明軍によって、福建省にある倭寇の拠点が制圧されてしまいます。同時に、西日本で土地売買が銭建てから米建てに一齐に変わります。その後徐々に銀建てに変わっていくのですが、これは中国からの銅銭供給という水道の蛇口を閉められたためと考えられます。これを契機に、中国への銀供給の主



茨城県東海村の村松白根遺跡は、二〇〇三年四月から二〇〇四年八月まで発掘調査が行われた。中世後半以降の大規模製塩跡を中心とする生産集落とされる同遺跡からは、一七〇〇枚を超える古銭(下)や、鑄銭最終工程にできる永楽通宝の枝銭(右)が出土した(写真提供(財)茨城県教育財団)。



【参考】貨幣史の流れ——渡来銭経済の動揺

西暦	日本	中国	北 宋	南 宋	元	明
1000		●唐代～海外への銭貨流出による国内銭貨不足(銭荒)のため、海外輸出禁止(銭禁)				
1100	●渡来銭(宋銭)盛んに流通 ●日宋貿易盛んに(宋銭の輸入) 1185 平氏滅亡 1192 源頼朝、征夷大将軍となる 1193 朝廷、宋銭の使用禁止	●世界最古の紙幣発生(北宋「交子」、商人が発行元の私札紙幣) 1023 官営の紙幣発行機関設立 ●北宋、鑄銭盛んに実施(中国歴代王朝中最大) 1127 宋(北宋)が減び、南宋成立 宋銭中国より流出 1160 南宋、紙幣「会子」を発行				
1200	1226 幕府、渡来銭の利用を公式に認める	1199 南宋、日本・高麗への銅銭帯出禁止 1206 チンギス=ハン、即位				
1300	1270代 年貢の代銭納化 1274 元寇(文永の役) 1281 元寇(弘安の役) 1338 室町幕府成立 1342 足利尊氏、天竜寺船を元に派遣	1260 フビライ=ハン即位 「中統元宝交鈔」発行、紙幣の発達・浸透 1271 元建国 1277 元、紙幣専用政策、銅銭使用禁止 大量の中国銭中国より流出 1279 南宋滅亡、元が中国全土を支配				
1400	●倭寇の活動活発化(前期倭寇) 1401 足利義満、遣明船派遣 1404 日明勘合貿易開始 ●銅銭の輸入 ●宋銭・明銭(永楽通宝等)の利用 1411 明との国交一時断絶 1429 琉球王国成立 のちに銅銭自鑄 1432 足利義教、明に遣使、国交再開 ●公鑄明銭輸入減少、私鑄明銭を大量輸入 ●渡来銭を模した本邦私鑄銭の大量鑄造 ●朝鮮、琉球、安南(ベトナム)から銭貨を輸入 1467 応仁の乱 ●私鑄銭の著しい増加、撰銭行為盛んに 1485 最初の撰銭令(周防大内氏) 1500~13 幕府、撰銭令発令を繰り返す 1523 寧波の乱 1542~69 幕府諸侯しばしば撰銭令布令 1547 最後の勘合船出発 ●戦国大名による金・銀鉱山の開発 ●武田氏領国で「甲州金」使用される ●倭寇の活動活発化(後期倭寇) 1560 桶狭間の戦い 1569 織田信長、撰銭令 1573 室町幕府滅亡 1570年代 銀による建値始まる	1368 明建国 元、北方に去る 銅銭鑄造 ●倭寇取り締まりのため、私貿易禁止 1368~98 金、銀、銅銭の海外輸出禁止、「頒賜銭」として朝貢使には銅銭を与える 1375 「大明通行宝鈔」発行(世界最大の紙幣) 1392 高麗滅亡、李氏朝鮮建国 ●明を中心とする朝貢貿易活発化 1405~33 鄭和、南海諸国歴訪 1408 第3代皇帝永楽帝「永楽通宝」発行開始				
1500		●明、国内銅貨不足を理由に輸出禁止 ●明、撰銭行為盛んに ●明中期、偽「古銭」の私鑄が流行 1540頃 大量の銀流入、銀遣いへの傾斜 1567年前後 明軍による倭寇の拠点制圧 1570年代 中国への南米銀流入開始				

役は、マニラ経由の南米ペルー・ポトシ銀山に取って代わられます。一旦行き場を失った日本の銀は国内に向かわざるを得ません。銀産出をしながら、銀建ての

表記が一六世紀の末になってから史料に現れ始めるのも、こうした東アジア全体の銀の流れを考えると、つじつまが合うのです。こうした東アジア規模の変動期

にあわせるように織田信長は上洛し、銭の交換比率を定めようとしています。時代の流れを感じ取った上での上洛であったなら天才的といえますが、こうしてみても

したように、一七世紀初めまでは、日本列島内の歴史といえども東アジア全体の流れの一部として考えないと理解できません。それは、信長とて例外ではないのです。

一二七七年、元の紙幣専用政策により、使用が禁止された銅銭は国外へ大量に流出し、日本を含む東アジア全域に拡大していったが、明る一四世紀になると、中国からの銅銭流出が鈍化したことなどにより、日本は一転して銅銭不足の状態に陥った。その補完的役割を果たしたのが私鑄銭だったのである。

日本の私鑄銭は、国内で鑄造されたほか、中国からもたらされた。一六世紀に入ると、中国からの私鑄銭が大量に入り、精銭を凌駕する勢いとなったため、室町幕府をはじめ戦国大名たちは、度々撰銭令を公布して、取引の混乱を收拾しようとしたが、効果は上がらなかった。

日本の銭経済は、一五七〇年前後におきた中国からの銅銭供給の途絶により、ついに破綻の時を迎える。明軍が倭寇の貿易拠点を制圧したことや、フィリピン経由でペルー・ポトシ銀山の銀が大量に流入し、中国沿岸を銀遣い地域に変えてしまったことなどにより、日本への銭の供給が停止したのである。それにより、西日本では、銭経済が放棄され、米遣い、ついで一六世紀末には銀遣いへの急激な転換が起きた。一方、銭が比較的豊富だった東日本では、しばらくは永楽通宝を基準貨幣とする銭経済が維持されたが、銭の希少化はここでも進行し、やがて永楽通宝は市中から姿を消すことになる。